

ツーリズムと観光の定義

——その語源的考察、および、初期の使用例から得られる教訓——

佐 竹 真 一

要約

Tourist という単語は 18 世紀後半に、tourism は 19 世紀初期に、確立された。Tourism についての新たな定義は、1990 年代に推進され始めた UNWTO による TSA の構築過程において与えられ、国際的な合意が形成されてきている。この国際的な合意に基づく tourism には、「観光」の持つ意味空間の広がりに対応する広がりとは、与えられていない。Tourism を日本語で用いる際には、ツーリズムとカタカナ表記をもって対応させ、語源的な発生状況や国際的な合意に基づく意味において、用いるべきである。

キーワード：観光、tour、tourism、tourist、travel、journey、trip

1. 問題意識

日本の観光研究の現状を顧みると、基本的な用語である「観光」の定義には、量的研究を可能ならしめる形態での定説が存在せず、研究者の間に混乱が見られ、相互の知見の円滑な共有を阻害している。更にこの状況は、多くの関連分野が存在し共同研究の必要性が高いにも拘わらず、多様な研究者との共同研究を進める上での阻害要因ともなっている。

一方、tourism に関しては、UNWTO による TSA の構築過程において、国際的な合意に基づく定義が一定水準で得られており、TSA に基づく観光統計の整備などの量的研究に大きな貢献がなされている。

本稿では、日本の観光研究の現状を改善する前提を整えることを目指して、tourism という単語に関する語源的研究の成果として定説となっている、英語の中に定着したのは 19 世紀初期である、との知見に基づいて、tourism 及びこれに関連する英語の単語の歴史的背景を概述し、さらに、上記の現時点における国際的な合意に言及して、これらの意味空間の解明を試みる。

これらのことを踏まえて、ツーリズムと「観光」との比較・対照を行い、「観光」の定義に関する議論の整理に資することを目的とする。

2. 本 論

2.1. Tourism およびこれに関連する単語の語源の考察

Tourism の初出は、19 世紀初頭の 1811 年とされる。その語源である tour の初出は、1320 年とされ、ラテン語で「旋盤、回るもの」の意があり、もともと円を描く用具を示すラテン語の tornus から発生したものといわれる。Tour が旅をする意味に用いられたのは 17 世紀に入ってからであり（初出、1643 年）、動詞として確立されたのは 18 世紀中頃（初出、1746 年）である。Tourist の初出は、1780 年とされる^{1,2)}。

Tour、Tourist、Tourism のいずれにも、出かけて元に戻る、と言う意味に重点がある。

因みに、「旅」に関連して英語でよく用いられる travel、journey、trip という単語の語源は、以下の通りである。

Travel は、もともと“苦勞して働く”と言う意であり、14 世紀から旅をする意味に用いられてきた。これには、中世にはどこに行くにも困難であったことが反映されている³⁾。

Journey は、13 世紀初頭に、もともとの“その日の仕事・働き”から、“旅の定められた進路”と言う意味に用いられている。18 世紀になっても“一日のたび”が基本的な意味である。動詞として用いられ始めたのは 14 世紀である⁴⁾。

Trip は、“短い旅”の意味に用いられ始めたのは、17 世紀末のことである⁵⁾。

2.2. Tourism が確立されてきた歴史的背景：産業革命とツーリズムの進展

Tourism が、英語の中に単語として確立されていった 17 世紀から 19 世紀にかけての主要な歴史的な背景としては、イギリスにおいて 1760 年代から 1830 年代にかけて進展した産業革命があげられる。

イギリスでは、この産業革命の進行に伴い、工場労働の一般化が進行し、労働者階級が形成され、中流階級の成長、および地主貴族階級の成熟による三階級構造の確立してゆき、消費社会の定着など、大きな社会的変化が生じていく。

産業革命が進展するに伴い増加を続けていった都市住民が、都市にある彼らの定住地を拠点として、海浜リゾート地に向けて休日を利用したリクレーションを、集団的に、あるいは、家族や近隣住民と共に、反復する行動が、社会現象として拡大していった⁶⁾。

この定住地を拠点として、海浜リゾート地などの定住地以外の場所を訪れたり、一定期間その地に滞在したりしたのちに、再び定住地に戻るという社会行動に対して、tour という単語が与えられた。この社会行動の主体たる個人には、tourist という名称が与えられた。

Tourist による社会的な行為や行動の集積や相互作用によって引き起こされる社会現象に対して、tourism という呼称が創り出されていったことが、上記の関連用語の語源に対する知見によっても、裏付けることができるのである。

Tourism という社会現象には、地主・貴族階級の社会行動の影響が、中流階級を経て労働者階級に及んでいくというベクトルを観察することができる。と同時に、そのいずれの階級をも巻き込んだ大きな社会的変化でもあった。

また、産業革命には、「交通革命」とも呼ばれる移動手段の飛躍的な発達が伴い、Tourism の飛躍的発展を支えてきている。1807 年、フルトンによる蒸気船が実用化され、1804 年、トレビシックによる蒸気機関車の発明がなされる。蒸気機関車は、スチーブンソンによって実用的に改良されたことなどが、その先駆的な事例である。

それまでの交通網となっていた河川や既存の運河を利用できる蒸気船の効果は、直ぐに表れた。線路を敷設する必要があった蒸気機関車の効果が現れるまで時間がかかったが、1830 年代後半になると鉄道網の整備が進み始め、1850 年までには 6000 マイルの鉄道が開通している。この時期には、世界各地で「鉄道狂時代」とも呼ばれる鉄道網の建設ラッシュが続いている。

トーマス・クックは、これらを背景に、1843 年に世界最初のパッケージツアーを案出して大きな成功をおさめ、「近代ツーリズムの父」と呼ばれる活躍を開始する。その後、近代ツーリズムは、欧州各地を経て世界各地に、急速に広がって対象地域を拡大していき、利害関係者を拡大し、マスツーリズムを進行させ、旅行形態の多様化を進めていった。

2. 3. Tourism の定義

Tourism についての現代的な定義は、1990 年代に広く推進され始めた UNWTO (United Nations World Tourism Organization : 国際連合世界観光機関) による TSA (Tourism Satellite Account : ツーリズム部門会計) の構築過程において与えられ、国際的な合意が形成されてきている。

最新のものとしては、TSA : RMF 2008、即ち、“**Tourism Satellite Account : Recommended Methodological Framework 2008**”⁷⁾によって、下記のような定義が与えられている。この定義において、tourism は、travel、即ち「旅行」乃至は「旅」の特殊形態の一つとして、より具体的な構成要件が与えられている。

“Tourism is more limited than travel, as it refers to specific types of trips : those that take a traveler outside his/her usual environment for less than a year and for a main purpose other than

to be employed by a resident entity in the place visited. Individuals when taking such trips are called visitors.”

上記の定義には、2000年に国連総会に提案された **TSA : RMF 2000**、即ち、“**Tourism Satellite Account : Recommended Methodological Framework 2000**”⁸⁾による下記の定義との間に、重要な共通する合意内容がある。

“Tourism is defined as the activities of persons traveling to and staying in places **outside their usual environment** for **not more than one consecutive year** for leisure, business and other purposes not related to the exercise of an activity remunerated from within the place visited.”

この定義の日本語訳は、下記の通りとなろう。

「ツーリズムとは、継続して**1年を超えない範囲**で、レジャーやビジネスあるいはその他の目的で、日常生活圏の外に旅行したり、また滞在したりする人々の活動を指し、訪問地で報酬を得る活動を行うことと関連しない諸活動と定義される。」

TSA : RMF 2008 と **TSA : RMF 2000** の両者の定義の共通する部分は、筆者によって太字とした部分であり、これら二つの定義の間にある約10年間に、この部分には国際的合意の変化はなく、基本的な国際的合意が得られていると考えてよい。即ち、その合意内容とは、**旅行期間が1年以内**であることと、**旅行者の日常生活圏を想定しそこに戻る行動を伴う**ことを、**tourism** の基本的な構成要件としていることにある⁹⁾。

旅行期間が限定されることによって、日常生活圏に「戻る」という行動が、必然的に含意されていることを指摘するまでもないであろう。

2.4. ツーリズムの定義における相違点

これら二つの定義の相違点は、**Main differences between TSA : RMF 2000 and TSA : RMF 2008**¹⁰⁾において、より具体的に纏められている。

二つの定義の間に横たわる約10年間の時間的経過を経て、このような相違点が生じてきた背景には、この間に、**tourism** が社会現象として発生する地域が、地球的な規模にまで急速に拡大してきたことがある。

その為に、それぞれの地域に存在する歴史的・文化的・社会的な多様性や差異性や相違性などの及ぼす影響が拡大し多様化して、**tourism** に含意される意味空間に包摂されるべき社会現

象を定量的に把握する作業を進める上で、相違性を拡大する多様化の広がりという形で、大きく被ることになった点があげられる。

更には、個人に着目して *tourist* の行動形態を究明する上においても、一人ひとりの背景にある歴史的・文化的・社会的な多様性の及ぼす影響が、具体的に顕現する場面が拡大し、画一的な行動から個性的な行動への移行が進んできていることも、多様化の広がりを拡大する要因としてより強く働き始めていることも、この背景にある。

因みに、この多様性の広がり、ツーリズム需要の発生源であるツーリズム市場においても、供給源である観光地 (Destination) においても、相互にダイナミックに影響を及ぼし合いながら、同時に進行している。

つまり、このように拡大を続ける多様性の広がりを通貫する共通性や一般性や普遍性を担保するために、より具体的には、各地で採集される観光統計の共通性や一般性を確保し、相違性や多様性を克服して、国際比較を可能ならしめるために、ターミノロジー上の要請に応えるべく、言語表現上の工夫が重ねられてきたのである。

2. 5. 日本における「観光」の定義の現状と対策

日本における観光研究が、上記の *tourism* の定義の構成要件を具備する単語は日本語には存在しないという現状を放置して、このような国際的な状況をないがしろにしておいては、発展の余地が極めて限られたものとなる惧れがある。

日本語を用いて観光研究を進めていく場合にも、上記の UNWTO において重ねられてきたような定義における言語表現上の工夫が、観光関連学会の場などを通じて、今後さらに、重ねられる必要がある。

「観光」の持つ意味空間の広がりに対応する広がり、上記の国際的な合意に基づく *tourism* には、与えられていない。換言すれば、上記の **TSA : RMF 2008** において与えられている *travel*、即ち、日本語において「旅行」乃至は「旅」に含意される意味空間を限定した特殊な形態であるとする *tourism* の定義に対応し、その構成要件を具備する単独の日本語は、現時点で、存在しないのである。

「観光」の持つ意味の広がりには、より一般的な広がりを持つ「旅」の持つ意義についての含意が込められており、*tourism* の持つ意味の広がりを、その広がりの中に内包する関係にある。

従って、意味空間がお互いに異なっている「観光」と *tourism* を、同列に扱ったり、同義語として用いたりすることは、様々な混乱を生じさせる原因となり、科学的方法論において要請されている手続きに忠実であるべき研究者としては、観光分野においても慎むべきことであ

る。

しかしながら、2004年1月19日に、第159回国会における小泉内閣総理大臣施政方針演説の中で行われた観光立国宣言¹¹⁾においても、この宣言に基づいて立案され、2007年1月1日から施行された観光立国推進基本法¹²⁾においても、その背景には、観光の定義に関して科学的方法論に基づく「観光」の定義に関する厳密な議論の積み重ねは、存在しなかったと言わざるを得ない。

基本用語の定義に関する知見の積み重ねが欠如している為に、観光研究の定量的なデータに基づく研究を構築する基盤も脆弱なままに留まらざるを得ず、観光学研究を政策科学として応用する機会も限定的である。

総合的で統合的な観光政策の立案と実行の必要性が高いにも拘らず、このような状況では、実現可能性 (feasibility) が高く、実証可能な政策体系を創り出すことは極めて困難である。

インバウンド・ツーリズム政策を展開するには、観光分野の研究者が、多国間にわたって共同研究を遂行して、多国間において知見を共有し、その成果を政策立案担当者に随時提供していくことが必須であるが、これも、主要な用語に関する国際的な合意に関する理解が不足しては、極めて限定的とならざるを得ない。

このような日本における「観光」の定義の現状を踏まえた対策として、カタカナ表記のツーリズムによって、tourism に対応させ、その意味空間には、上記の **TSA : RMF 2008** による定義を存知させる、といった工夫が必要である。本論文においても、これ以降の表記にカタカナ表記のツーリズムを用いるのは、こうした配慮に基づくものである。

2.6. ツーリズムの意義に関する考察

ツーリズムには、多様な関連分野があり、この視点からは、後述する「観光」の含意する意味空間の広がりとも共通する部分が多い。主要な関連分野における観光の意義を略述すれば、以下の通りとなろう。

ツーリズムの経済的意義

ツーリズムが、イギリスの産業革命の進展を歴史的背景とする社会現象を描写する言葉として確立され、その経済的インパクトが歴史的経過とともに巨大なものとなっていき、一国の経済を左右するほどの規模となってきた。

さらには、21世紀の世界経済の基幹産業の一つとなり、多くの発展途上国の経済的発展にとって欠かすことのできない産業としての地位を、固めつつあることは衆目の一致するところである。

その実態の経済的側面に対して、定量的アプローチの手法を拡充し、数学的・統計的手法に基づく経済学や経営学に蓄積されてきている知見との融合を図っていくことは、理の赴くところである。

この融合の成果には、経済政策の一環としての観光政策が位置付けられる。

ツーリズムの文化的・社会的・哲学的意義

一方で、ツーリズムには、観光地を抱える国家にとっては、国民のアイデンティティを確かめ、自尊心を満足させ、愛着を受け止め、誇りを高めるといった意義深い側面がある。その国の観光資源には、さらに、国際的な視点から評価を加えたり、自国の文化や価値の体系からの評価を越えて世界的・人類的価値基準から再評価を加えたりすることを通して、その普遍性や一般性を確かめるという側面もある。

ツーリズムに関する科学的アプローチが、1920年代の後半に、ヨーロッパ各国で、第一次世界大戦で荒廃した国土や、失われた国民の誇りや、衰退した経済的国力を回復することを目的として、政策科学の一環として始められた歴史的経過がある。ここにおいても、同様の意義が、経済的成果とともに、追求された。

このような側面に注目する場合には、「観光」という言葉に二千数百年にわたって蓄積されてきた意味空間の広がりや、幅広く踏まえる必要がある。

ツーリズムの日本における意義

現代の日本においても、「地域の活性化」という掛け声のもとに、観光の持つ経済的側面にスポットライトが当てられる場面が増加してきているが、上記の経済的意義と並んで、文化的・社会的・哲学的意義についての認識をさらに深めていく必要がある。

2.7. 「観光」の日本における最古の使用例

上田卓爾に、“日本における「観光」の用例について”と題する優れた論文がある¹³⁾。この上田の論文によって、幕末から明治にかけて広く用いられるようになってきた「観光」には、日本において、これまで広く共有されてきた知見に比べて、より古い用例が存在し、かつ、それぞれの時代の知識層に属するものたちによって、より広い意味において用いられてきたことが明らかにされている。

この論文には、多様な文献を過去に遡りながら精力的に渉猟する方法を用いて、日本における最古の用例を探索した綿密な作業の途中経過の成果として、15世紀にまで遡る以下に紹介するような用例が報告されている。

これらの用例は、紀元前4世紀ごろに成立したとされる易経において用いられ、その後の解釈においても承継されてきた「観光」の意味空間が前提となっており、本論文で論じてきたツアーリズムの定義の範囲を大きく超えていることに注意すべきであるので、長くなるが執筆者の了解のもとに該当箇所を直接に引用する。

[引用開始]

(略)

「日華文化交流史」によれば外交文書である「遣明表」があり、京都五山の僧徒のうち文筆に長じたものに命じて草せしめるを例とし、との記述があり、それを掲載した文献の一つとしてあげられている興宗明教禪師、すなわち瑞溪周鳳の作である「善隣国宝記」を参照したところ、3例を得ることができた。

(中略)

①「善隣国宝記」所収用例（3例）

i：日本国王臣源一表、(中略) 是以謹使僧圭密・梵雲・明空・通事徐本元、仰觀清光、伏獻方物（後略）

(日本国王 臣源一表す。(中略) 是を以て謹みて僧圭密・梵雲・明空・通事徐本元をして、仰ぎて清光*2を觀、伏して方物を獻ぜしむ（後略）)

年号は書かれていないが、頭注および「日華文化交流史」によって僧圭密・梵雲・明空の入明は応永10年（1403年）とされる。

ii：永享四年*3《後華蘭院》遣唐表、(中略) 是以、謹使某人仰觀國光、伏獻方物（後略）
(永享四年《後華蘭院》唐に遣わす表、(中略) 是を以て謹みて某人をして仰ぎて國光を觀、伏して方物を獻ぜしむ（後略）)

iii：(善隣国宝記 跋文) 偶因徐福是觀光上國、而孔子全經獨存于日本爾

(中略) 丁酉*4之春三月上澣 西山塞馬閑人

(たまたま徐福の上國を觀光するに因りて、孔子の全經は独り日本に存するのみ（中略）)

丁酉の春明曆3年（1657年）三月上澣 虎林中慶）

(注)

*1. 上田「中国における『観光』の用例と日本への伝播」86頁

*2. 田中113頁頭注には「清光：貴人の清らかな姿」としてあるが、漢和辞典には用例が示されていないため、この訳には従わない。また、「仰觀清光、伏獻方物」の句がiiの「仰觀國光、伏獻方物」と一字違いであるため、「觀光」の例として採ることとした。

*3. 永享四年と明記されている。1432年。

*4. 明曆3（1657）年。

[引用終了]

上田は、更にこの論文の“まとめと今後の課題”の中に、「現在判明している最古の用例から昭和 5（1930）年の鉄道省国際観光局に到る用例をまとめたものである」と述べて、当該論文を投稿する時点までに判明している 29 個の用例を、年代順に一つの表にまとめて提示して、日本において「観光」という用語が歴史的経過の中で継続的に使用されてきたことを例示しながら、「観光学もしくはツーリズム論の研究者間の常識となることを希望したい。」としている。

3. 結 論

日本語における「観光」の意味空間の広がりをもとに、tourism を日本語にて用いる際には、ツーリズムとカタカナ表記をもって対応させ、上記の語源的な発生状況や国際的な合意に基づく意味において、用いるべきである。

参考文献・引用文献

- 1) ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY の“tour”の項を参照。
<http://www.etymonline.com/index.php?term=tour> 2009年5月6日10:29取得。
 tour (n.)
c. 1320, “a turn, a shift on duty,” from O. Fr. tour, tourn “a turn, trick, round, circuit, circumference,” from torner, tourner “to turn,” from L. tornare “to polish, round off, fashion, turn on a lathe” (see turn). Sense of “a traveling around, journey” is first recorded 1643. The verb is attested from 1746. Tourist is first attested 1780; tourist trap attested from 1939 in Graham Greene; tourism is from 1811. Tour de force “feat of strength” is 1802, from Fr., from force “strength.” Tour de France is recorded from 1922. The Grand Tour, a journey through France, Germany, Switzerland, and Italy formerly was the finishing touch in the education of a gentleman.
- 2) The Oxford English Dictionary 1989 2nd ed.
- 3) ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY の“travel”の項を参照。
<http://www.etymonline.com/index.php?search=travel&searchmode=term> 2009年5月6日10:30取得。
 travel (v.)
c. 1375, “to journey,” from travailen (1300) “to make a journey,” originally “to toil, labor” (see travail). The semantic development may have been via the notion of “go on a difficult journey,” but it may also reflect the difficulty of going anywhere in the Middle Ages. Replaced O. E. faran. Travels “accounts of journeys” is recorded from 1591. Traveled “experienced in travel” is from 1413. Traveling salesman is attested from 1885.
- 4) ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY の“journey”の項を参照。
<http://www.etymonline.com/index.php?search=journey&searchmode=term> 2009年5月6日10:39取得。
 journey
c. 1225, “a defined course of traveling,” from O. Fr. journée “day’s work or travel,” from V. L. diurnum

“day,” noun use of neut. of L. *diurnus* “of one day” (see *diurnal*). As recently as Johnson (1755) the primary sense was still “the travel of a day.” The verb is from c. 1330. *Journeyman* (1424), “one who works by day,” preserves the etymological sense. Its Amer. Eng. colloquial shortening *jour* (adj.) is attested from 1835.

- 5) ONLINE ETYMOLOGY DICTIONARY の “trip” の項を参照。
<http://www.etymonline.com/index.php?search=trip&searchmode=term> 2009年5月6日10:42取得。
 trip (v.)
 c. 1380 (implied in *tripper*), “tread or step lightly, skip, caper,” from O. Fr. *tripper* “strike with the feet” (12 c.), from a Gmc. source (cf. M. Du. *trippen* “to skip, trip, hop,” Low Ger. *trippeln*, Fris. *tripje*, Du. *trappen*, O. E. *treppan* “to tread, trample”) related to **trap**. The sense of “strike with the foot and cause to stumble” is first recorded c. 1425. Meaning “to release” (a catch, lever, etc.) is recorded from 1897; *trip-wire* is attested from 1916.
 trip (n.)
 “act or action of tripping,” 1660, from **trip** (v.); sense of “a short journey or voyage” is from 1691, originally a nautical term, the connection is uncertain. The meaning “psychedelic drug experience” is first recorded 1959 as a noun; the verb in this sense is from 1966, from the noun.
- 6) ジョン・アーリ、「観光のまなざし」、加太宏邦訳、法政大学出版局、1995年2月22日、初版第1刷
 ジョン・アーリ、「場所を消費する」、吉原直樹／大澤吉伸監訳、武田篤志・松本行真・齊藤綾美・末良 哲・高橋雅也訳、法政大学出版局、2007年5月1日、第3刷
- 7) Tourism Satellite Account: Recommended Methodological Framework 2008 を参照。2009年5月6日11:36取得。
<http://unstats.un.org/unsd/tradeserv/TSA%20RMF%202008%20edited%20whitecover.pdf>
- 8) Tourism Satellite Account: Recommended Methodological Framework 2000, UNWTO, 2001 を参照。
- 9) 佐竹真一、「ツーリズムの定義とその用法」、日本観光学会第99回全国大会発表、2009年10月10日、夙川学院大学にて、
- 10) Main differences between TSA: RMF 2000 and TSA: RMF 2008 を参照。2009年5月6日11:45取得。
http://www.unwto.org/statistics/tsa_rmf/annex.pdf
- 11) 第159回国会における小泉内閣総理大臣施政方針演説（平成16年1月19日）、2009年10月25日11:39取得
<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2004/01/19sisei.html>
- 12) 観光立国推進基本法（平成十八年十二月二十日法律第百十七号）、2009年10月25日11:29取得
<http://law.e-gov.go.jp/announce/H18HO117.html>
- 13) 上田卓爾、「日本における「観光」の用例について」、名古屋外国語大学現代国際学部紀要、2007年